回想の記

庭野正之助

大平総理とは大学同期の卒業とはいえ、私は学生時代、剣道部の方に熱心で、大学の正門を入っても本館の前を通り抜け図書館の横を通って、裏手の松林のなかにある剣道場に直行することが多かった。

一方、大平さんはゼミナール、研究会、図書館、ＹＭＣＡ等々、研鑽修業に励んで十二分に充実した学生生活を過ごし、高文までパスした勉強家である。多分、大平さんの頭のなかには剣道部に庭野という男がいたという記憶が残っていた、という程度であるかも知れない。

卒業後も、戦前は転勤やら兵役やらで、これまたすれちがい。幹事の世話で同級会等が開かれ、時折、顔を合わせるようになったのは、戦後もしばらくたって社会情勢も多少落ち着いてきた頃からであったと思う。

大平さんは多忙のなかを縫り合わせてよく会合に出席し、同級生の人気の中心であったことはいうまでもない。この人の持つ心の温かさ、広さに加えて、時を経るにしたがってますます錬成された重厚な人柄が、たくまずして同学、同期の人々の心をひきつけたということであろう。

各省大臣あるいは自民党幹事長時代には、業界のことで、時には大勢で、時には独りで、当時の秘書官の森田さんや真鍋さんを煩わして陳情に出かけた。多忙のなかを、いつも都合をつけて耳を傾けてくれたことを、感謝の念をもって想い出す。

各方面への陳情の結果を報告しお礼を申し述べても、いつもまるで自分は何ら関与することはなかったような

口調で「ああそうか、君達のいうとおりのことになったのか」とか、「そりゃよかったね」というような返事ぶりであった。天性の謙虚さというのか、自己宣伝ぎらいというのか、なかなかできることではないと、今に至るも深い感銘を覚える。

二度目の外務大臣時代、昭和四十九年六月の初めのことであったと思う。私は社長就任のあいさつに外務大臣室にうかがった。

ちょうど前月、大平さんは訪米の機会にエール大学で名誉法学博士号を受けて帰っていたので、その時のことが話題になっているうちに、「昔から末は博士か大臣かという言葉があるが、大臣になったし博士にもなった。文句があるかと家内にいったら、家内から文句はないけど早くやめて下さい、といわれたよ」ということで、平素口の重い故人には珍しい話し振りであった。

大平さんが亡くなってから、令夫人にお会いする機会があったので、その時のことをお話ししたところ「エール大学の名誉学位を受けた時は、総理になった時よりも喜んでおりました」とのことであった。

任重くして道遠く、心労が尽きることのない政治生活のなかで、読書家の哲人政治家にふさわしいひとときの心の晴れ間であったのであろうか。

（日本鉱業会長）